わたしの郷土

河内小学校六年
中村　福日（とみか）

美しいみかんの町

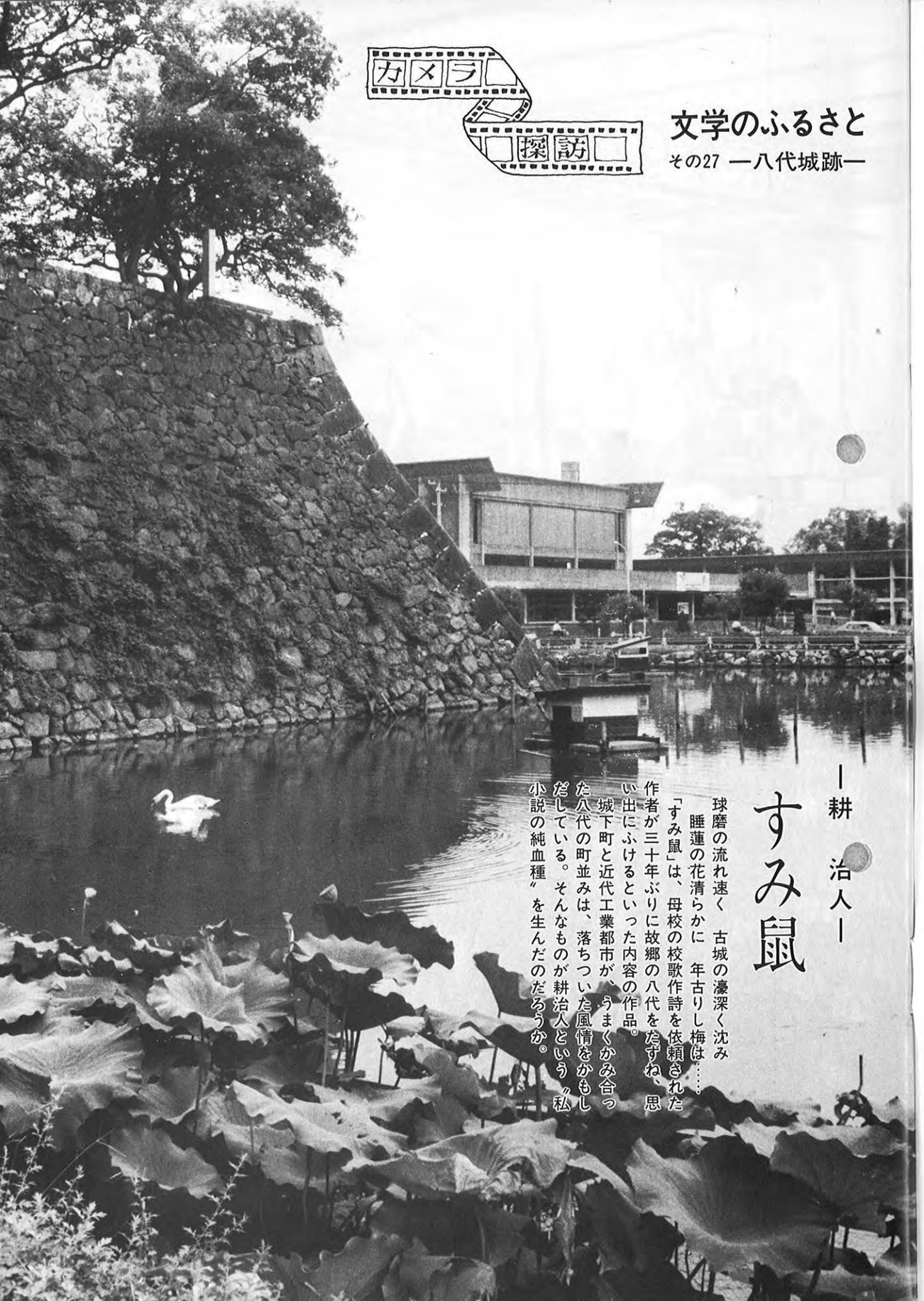
わたしたちの町は、みかんの町です。西には有明海が広がり、三方をみかんの山にかこまれた静かな町です。みかん山から有明海の方を見れば、島原、雲仙岳が見えます。

五月ごろになると、真白なみかんの花が開き、町中が花の香りに包まれます。このころになると、害虫もでてくるので航空防じょや、消毒をしたり草をひいたりみんながいそがしくなります。

夏には、きずのあるみかんや実のつきすぎているみかんを一つ一つ手でもぎとるてっか作業があります。真夏の暑い時の作業でとてもきつそうですが、秋に大きいみかんをとるための作業だそうです。

こうして大きくなったみかんが秋には山全体をきれいなオレンジ色に変えます。あちこちの町外からみかんとり入れ作業をする人達がこられ、みかん見物のバスなども多くきてにぎやかな町に変わります。この時期は、ねこの手もかりたいほどのいそがしさです。昔はかついだり、牛や馬に積ませたりして、とり入れが行われていました。それがケーブルに変わり、最近はほそうされた農道がいたる所に作られ、車も畑に横づけされ、モノレールがひかれて、昔に比べれば、作業も楽になりました。でもちぎるのだけは、ハサミで一こ一こきずがつかないようにていねいにちぎられ、畑や庭に建てられている貯ぞう庫に貯ぞうされ、出荷をまちます。

河内みかんは味もよく品質もよいので、全国に有名で、各地に出荷されています。ここまでになるには、みんながいつも研究し、工夫し、努力した結果だと聞いています。町全体がひとつになってみかん栽培にとりくむ姿は子供にとってもほこりであり、大人にまけないように勉強やスポーツにがんばらねばならないと思います。



カメラ探訪

文学のふるさと

その27 ―八代城跡―

すみ鼠

―耕　治人―

球磨の流れ速く　古城の濠深く沈み
　睡蓮の花清らかに　年古りし梅は……。

「すみ鼠」は、母校の校歌作詩を依頼された作者が三十年ぶりに故郷の八代をたずねて、思い出にふけるといった内容の作品。

城下町と近代工業都市が、うまくかみ合った八代の町並みは、落ちついた風情をかもしだしている。そんなものが耕治人という〝私小説の純血種〟を生んだのだろうか。